

## 【実践報告】

# 学生ステータスシステム *crescendo* 実装までの記録

東海国立大学機構岐阜大学における

eポートフォリオ導入の試み

長谷川 暁人

岐阜大学教育推進・学生支援機構

### 要旨

本稿は、令和5年度に東海国立大学機構岐阜大学において本稼働が始まった、「学生ステータスシステム *crescendo*」についての記録である。近年、高等教育業界においても学修成果の可視化などの観点から e ポートフォリオに対する注目は高まっており、そうした中でこのシステムを導入することにどのような意義があったのか、またどういったプロセスで本稼働に至ったのかを記しておくことは有用であろう。また、後半では、今後このシステムをどのように運用していくのかについての見通しも述べる。

キーワード : e ポートフォリオ, 学修成果の可視化, 個別最適な学び, 教育の質改善,  
ラーニングアナリティクス

## 1. はじめに

東海国立大学機構岐阜大学(以下、岐阜大学と表記する)では、令和5年10月より、「学生ステータスシステム *crescendo*」という名称の e ポートフォリオシステムを導入した<sup>1</sup>。この「学生ステータスシステム」という呼び名は、東海国立大学機構全体で用いているものであり<sup>2</sup>、「*crescendo*」の名称は岐阜大学においてシステムを導入するにあたって教育推進・学生支援機構(以下、教学機構と表記する)の構成員による合議の上、決定したものである。

本システムの主たる使用者として想定されているのは学生であり、後述する学生カルテ機能と学生ポートフォリオ機能を利用して、学生の「主体的な学修」を促すことが目的である。他方で、このシステムを利用して、教員側でも「教育の質保証」へつなげていくことを企図している。

本稿ではまず、この学生ステータスシステム *crescendo* を導入するに至った背景について述べていく。続いて、業者による入札が完了してから実際にシステムが稼働するまでに議論された審議事項や日数などの記録を示す。そして、既に運用が始まっているこのシステムで現在できることについて説明した後、今後の見通しについて述べていく。

## 2. *crescendo* 導入の遠景・近景

本章ではまず、岐阜大学において学生ステータスシステムが求められた背景を、日本政府が提示する方針などの大きな背景と、東海国立大学機構の DU 構想などの身近な背景に分けて説明したいと思う。その後、このシステムを本稼働するまでに経てきたプロセスについて、日付を記した定量的な記録として残しておきたい。

### *crescendo* 導入の遠景

今回、岐阜大学に導入された学生ステータスシステム *crescendo* は、近年高校や大学などの教育業界で注目が集まっている e ポートフォリオと呼ばれるシステムの一つである。e ポートフォリオとは、学生が自身の学修や課外活動の成果を振り返ったり、教員が学生の成績や活動の履歴を確認し、指導に役立てたりすることができるオンライン(Web)上のシステムを指す。

このように e ポートフォリオに注目が集まっている背景には、政府が提示した新たな社会コンセプト” Society5.0”が関係している。以下の図1に示すように、この” Society5.0”は情報化社会の新たなステージとして位置づけられている。

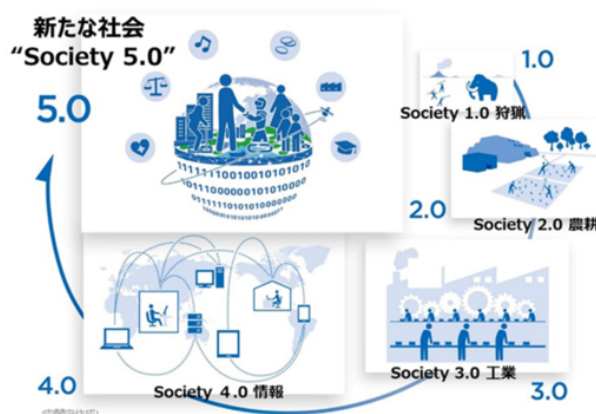


図1 ” Society5.0”とは

出所：内閣府ホームページ ([https://www8.cao.go.jp/cstp/society5\\_0/](https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/))

では、この” Society5.0”とはいかなる社会なのだろうか。内閣府ホームページによると、この” Society5.0”の一つのキーワードになっているのが、IoT (Internet of Things)である。



図2 IoTの説明

出所：内閣府ホームページ ([https://www8.cao.go.jp/cstp/society5\\_0/](https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/))

すなわち、これからの社会ではモノをインターネット化し、知識や情報を共有することで新たな価値を創造することが求められているのだと言える。こうした事情をバックボーンとして、大学においても、「個別最適な学び」の推進の一環として、近年 ICT(Information and Communication Technology)の活用が注目されるようになってきた。今回岐阜大学で導入が決まった学生ステータスシステム *crescendo* も、インターネット上のサービスを利用した学修成果の可視化という点で、この系譜に連なるものであると言える。以下の表は、学修ポートフォリオを導入している大学の数および全体に占める割合である。

表1 学修ポートフォリオを導入している大学の数（および全体に占める割合）

	国立	公立	私立	計(%)
H29年	54	19	202	275(35.9%)
R03年	62	22	248	332(42.8%)

出所：文部科学省ホームページ「令和3年度の大学における教育内容等の改革状況について」([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336\\_00000.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336_00000.htm))

より、筆者作成

この表を見るとわかるように、大学において学修ポートフォリオの必要性は高まっており、また実際に導入する大学も増えている。森本(2008)によると、欧米を中心に2000年頃からeポートフォリオシステムの開発・運用が始まったという<sup>3)</sup>。従来の紙ベースのポートフォリオと比べたeポートフォリオの利点として、大量のデータを保存・蓄積・複製できる

こと、またネットワークを通じてどこからでもアクセスできること、内容の編集や統合が容易なことなどが挙げられる。こうした観点から、eポートフォリオをラーニングアナリティクスに役立てようという試みも始まっている。小川(2015)は、例えば LMS(Learning Management System)に蓄積された学習ログをデータマイニングの手法を使って可視化、分析するように、eポートフォリオ上のデータを蓄積し、分析した上で学習者にフィードバックを促す方向性が今後顕著になっていくだろうと述べている<sup>4</sup>。

このように、欧米を含めた世界の教育業界の趨勢として、eポートフォリオへの期待は高まっていると言えよう。他方で、こうしたシステムを実際に活用するためには、システムそのものに対する利用者の理解や、実際の教育現場に適用されるという構造づくりが欠かせない。

### crescendo 導入の近景

前節で述べたように、eポートフォリオシステムの導入は世界的な傾向であり、岐阜大学においてもそうした流れを受けていることは間違いない。例えば、岐阜大学と名古屋大学で構成される東海国立大学機構が掲げている DU 構想基本計画においても、「1.教育・学生支援」において、学生ステータスシステムがデジタル学修支援やラーニングアナリティクスのためのシステムとして位置づけられている。

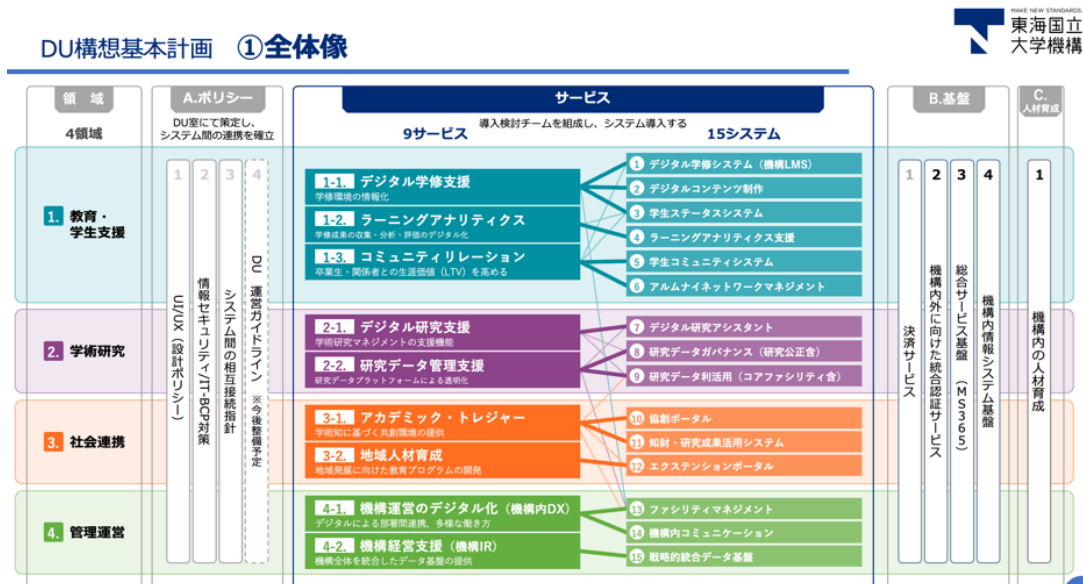


図3 学生ステータスシステムの位置づけ

出所：東海国立大学機構デジタルユニバーシティ室「デジタルユニバーシティ室における取組進捗状況報告」（2022年11月1日）

現状、岐阜大学の学生ステータスシステム *crescendo* と、名古屋大学で令和6年度に導入する予定の学生ステータスシステムとの間に、連携機能はない。岐阜大学で稼働が始まったシステムは、SIGEL社の「START」というシステムをベースにしたものだが、名古屋大学では既存の学務情報システムの強化という形でシステムを構築することになっており、両者の一元的な管理の見通しは立っていない<sup>5</sup>。これは法人として同一のシステムを利用するよりも、まずはそれぞれの大学の実態に即してeポートフォリオシステムを構築することを最優先した結果であり、今後の連携については、それぞれの大学でこうしたシステムがどれほど活用されるかにかかっていると見えるだろう。

### **crescendo 導入までの経緯、定量的記録**

この学生ステータスシステム *crescendo* は、令和4年度から令和8年度までの5年間にわたる計画として文部科学省に概算要求を提出し、補助金の交付を受けて進められているものである。以下に、令和5年度10月の本稼働に至るまでのおおまかな経緯と、その日付を記していく。

まず、岐阜大学で導入する予定の学生ステータスシステムについて、入札が完了したのが令和4年の11月であった。業者は株式会社SIGELに決まり、当該業者が提供している汎用システム「START」をベースとし、これを岐阜大学向けにカスタマイズすることで学生ステータスシステムを構築するという方向性が定まった。このプロジェクトは本学の教学機構が推進者となり進めていくことになり、同年12月20日に業者立ち合いのもと、キックオフとなった。

これ以降、教学機構メンバーにより、このシステムの大枠を定めるための議論が始まった。具体的には、12月23日、令和5年の1月6日、1月13日、1月20日、1月24日、1月30日、2月7日、2月15日、3月28日と、教学機構の主要メンバーと業者により、いくつかの方向性が明確になった。まず、システムの名称が、「*crescendo*」となった。これは、音楽用語としても用いられているイタリア語で、「次第に大きくなっていくこと」を意味する言葉である。学生が自らの学修成果を振り返り、主体的に学生生活を進めていく手助けとなる本システムにふさわしい名称といえよう<sup>6</sup>。また、岐阜大学独自の機能として、学生のモチベーションを高めるためのポジティブなバッジを実装する方向性も当初から志向されていた。そのため、どのような条件をクリアした場合に、どのようなバッジを付与するか、というアイデアを教学機構の教員全体から募ることになった。また、全学共通の尺度によって学修成果を可視化する、という視点から、基盤的能力の伸長度を学年ごとのレーダーチャートにすることもプロジェクトの計画段階から決定していた。このチャートの計算式や表示方法等についての議論も多くの時間を費やした。また、どの教員が、どの学生の、どのような情報を閲覧・編集できるのか、という点も注意深く設定する必要があった。学務情報システムには学生の個人情報を含んだ多くのデータが蓄積されているため、どれを今回の*crescendo*に紐付けるかが議論の焦点となった。これについても、学生の個人情報（生年月

日や住所など) はすべての教員に伏せるということがまず決まったが、成績履歴や活動記録などをどの範囲まで公開するかは難しい問題でもあった。というのも、現在、岐阜大学では学部ごとに学務情報システムの閲覧権限が異なっており、学生の情報を教員が広く閲覧できる学部と、ほとんど見ることができない学部があるなど、学部等によって大きな違いがあったからである。こちらについては、システムの導入経緯からして、教員が学生の指導に役立てていくという側面も重視されていたため、ある程度の閲覧を許可するという前提があった。そこで、所属する学科・研究科の教員は基本的にそこに所属する学生のデータを閲覧できる、という形で、極力ミニマムな設定にしておき、実装後に必要であれば学部内で議論の上、権限設定の拡大申請等をしてもらうことになった。

こうして、教学機構の主要メンバーが都度集まり開催していた打ち合わせだが、令和5年4月からこの学生ステータスシステム *crescendo* を含むいくつかのプロジェクトを推進する新たなセンター「教学 DX 推進センター」が教学機構内に発足したことを承け、教学機構内から数人のメンバーを選出し、ワーキンググループ(WG)を立ち上げることになった。このWGには、このプロジェクトの推進者として任命された長谷川暁人(准教授)の他、廣内大輔(准教授)、神酒太郎(准教授)、そして学務部教務課の教学DX係である青木英悟(係長)の計4名が岐阜大学側メンバーとして参加した。これに、学務情報システムを運営している富士通 Japan の黒川和代さん、岐阜大学のネットワークを提供している NTT ビジネスソリューションズの蓑輪朱美さん、ステータスシステムの開発・導入業者である SIGEL の出路雄也さん、河野良太さんといった外部の人間に加わっていただく、という布陣になった。このメンバーでのWGは隔週の木曜日の13時より開催するという原則のもと、長期休み等での休止を除いた4月27日、5月11日、6月8日、7月6日、7月20日、8月3日、8月31日に実施された。ここでの議論の結果は、およそ一ヶ月ごとに教学DX推進センターのセンター長である横田康成先生に報告するという形を取った。またこの間、岐阜大学側とSIGELでの個別検討会(5月30日、6月14日、6月30日)や各種会議等での進捗報告(岐阜大学運営会議、部局長部長会、教学機構連絡会議、教学DX推進センター会議等)なども行なった。また、名古屋大学DU室メンバーとの進捗状況共有(7月25日)や名古屋大学学生ステータスシステムの担当者との情報共有(8月30日)を行ない、東海国立大学機構全体としての進捗も確認した。

ここで主に議論されたこと、進めたミッションは、学生が就職活動等に用いる成績履歴や基盤的能力のチャート・学生の活動記録などをまとめた帳票の名称を決定すること、*crescendo* 周知のためのホワイトボードアニメーションを作成すること、岐阜大学図書館一階に置かれたアカデミックコアに勤務する学生を用いたデモ運用、*crescendo* のロゴ作成、大学ホームページの作成、ネットワーク開通のための打ち合わせなど多岐にわたる、また、引き続き、ポジティブなバッジの種類や付与方法の検討、教員の権限設定の機能ごとの検討なども行なった。これらは非常に細かな論点を含んでおり、さまざまな立場からの議論が必要になった。例えば学生が *crescendo* 上の記録を PDF 形式の帳票として出力する場合、こ

れはある程度公的な意味合いを持たせなければ就職活動には使えない。一方で、学生が個人的に記入した活動記録等に岐阜大学としての公的な証明を与えることはできない。このような対立の後、成績履歴や基盤的能力のレーダーチャート、GPAなどの公的な記録は「ディプロマ・サプリメント」（卒業確定まではプレ・ディプロマ・サプリメント）として一枚にまとめ、それ以降の学生の個人的な活動は「学修成果・課外活動記録」として分けて出力することになった。この他にも、横田センター長からのアドバイスにより学生に使ってもらうためのさらなる追加機能のアイデアなどもいただきながら、WGは進められていった。ここで出た追加アイデアのいくつかについては本稿後半で今後の課題として挙げていくが、こうした長期的な視野を持った議論を進めつつ、足元でのネットワークエラーの処理、会議等での周知等を行ない、なんとか令和5年10月の稼働に漕ぎ着けることができた。

次章では、令和5年10月より本稼働が始まったこの *crescendo* で現状できることについて述べていきたい。

### 3. *crescendo* でできること

学生ステータスシステム *crescendo* は、株式会社 SIGEL が提供している「学修成果アセスメントシステム START」という汎用的なシステムをベースに、これを岐阜大学向けにカスタマイズしたものである。*crescendo* は東海国立大学で用いられているその他のシステム（学務情報システム、TACT、Teasm等）同様、名古屋大学と岐阜大学のすべての構成員に共通で発行されている機構アカウントを利用してログインをする。

以下、現在のこのシステムにおいて実現されている機能について記述していく。

#### 学生ができること

*crescendo* の主たる使用者である学生にとって、このシステムでできることは非常に多岐にわたる。まず、学生カルテ機能と呼ばれる側面があり、これは岐阜大学で導入している学務情報システム<sup>7</sup>と連携し、そこに蓄積されている情報を独自の方法で描画するものである。それによって、学生は自らの成績履歴（単位取得科目一覧と成績評価）やGPAを確認することができる。また、それぞれの科目のシラバスに記載された基盤的能力のレーダーチャートの学年ごとの伸長度合いを確認することができる。この基盤的能力は岐阜大学が学生に身につけてほしいと望んでいる学士力の一つ<sup>8</sup>であり、「進める力」、「伝える力」、「考える力」から成っている<sup>9</sup>。学生はそれぞれの授業科目の単位を取得することで、その科目シラバスにチェックされている基盤的能力に一定の値が加算されることになる。具体的には、学生の成績評価（秀・優・良・可）によって重みづけがされた値を、9項目のうちチェックを入れた数によって除することで伸長度を決定し、それぞれの項目に加算する、という方式を採っている。この基盤的能力は学生が所属する学部の平均との比較が可能であるため、自身の能力が全体に対しどのような伸長度を示しているかの確認も可能である。



## 学生ステータスシステム crescendo 実装までの記録



図4 学生ステータスシステム crescendo 学生 TOP 画面

出所：学生ステータスシステム crescendo 学生画面（デモ学生）

また、このシステムには学生ポートフォリオ機能と呼ばれる側面もあり、こちらは学生自身が記入することで、学修の主体化を進めると同時に、学生生活の振り返りや就職活動に役立てられるものである。まず、学年ごとの目標設定と振り返りを記入することで、自身の学生生活に区切りとメリハリをつけることができる。また、キャリア・スキルアップ資格など、取得した資格等を証明書とともにアップロードすることができる。さらに、ゼミ・クラブ・サークル活動や、学内ボランティア・アシスタント活動なども記録しておくことができる。加えて、社会経験（インターンシップやアルバイト）についても場所や時期、内容を記録しておくことができる。特筆すべきは活動記録と呼ばれる機能であり、こちらは学内の授業を基本単位としながら、自身の活動内容や活動時期を記入できるものである。こちらは、学生自身が公開設定を選択することで、特定の URL を発行し、その URL を伝えられた人間が誰でもそのページにアクセスすることができる、という形を採っている。場合によっては、自分の活動をアピールするために、外部の人間に URL を伝えてショーケースとして見てもらうことも効果的であろう。

最後に、以上の学生カルテ機能、学生ポートフォリオ機能の情報をまとめたものを、PDF ファイルとして出力する機能を備えている。この PDF ファイルについては、岐阜大学が定めている基礎的能力や成績履歴一覧、GPA 値などは公的な記録として「ディプロマ・サプリメント」として出力することが可能である（卒業が確定するまでは「プレ・ディプロマ・サプリメント」とする）。その他の学生ポートフォリオ機能などで記入した情報については、学生自身が責任を持つ「学修成果・課外活動記録」としてまとめ、同様に出力が可能である。



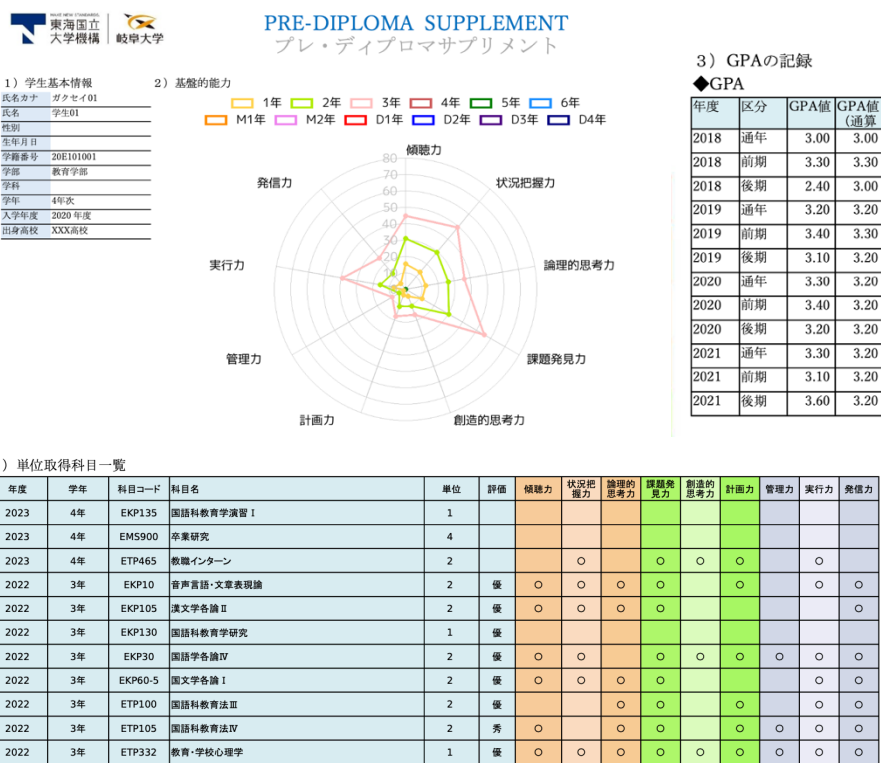


図5 ディプロマ・サプリメントのサンプル

出所：学生ステータスシステム *crescendo* ディプロマ・サプリメント（一部）

このように、*crescendo* では学生自身がこのシステムを能動的に利用することで、計画的な学生生活を送り、インターンや就職活動を有利に進めることができるようになる。

### 教員ができること

続いて、*crescendo* を用いて、教員ができることについても述べていく。まず、このシステムでは、基本的にすべての学生は所属する学科の教員と紐づけられている。そのため、教員は所属する学科の学生の情報を検索し、閲覧することが可能である<sup>10</sup>。



図6 検索画面

出所：学生ステータスシステム *crescendo* 検索画面

それによって、学生の成績履歴や基盤的能力のレーダーチャートを閲覧し、指導に役立てることができる。また、学生が記入した目標設定や振り返り、活動記録なども同様に閲覧し、コメントを残すことができる。

これに加え、教員側で要指導学生にネガティブなバッジを付与することもできる。不登校や成績不振など、注視して見守っていかなくてはならない学生について、バッジを付与することで教員間での共通認識を図ることが可能になる。このネガティブなバッジは学生本人からは見えないものなので、当該学生を検索することができる教員のみが閲覧可能であるため、プライバシーは守られたまま、いわゆるフェードアウトのような形で大学から遠ざかりそうな学生をサポートすることができる。

このように、教員側もこのシステムを使い、学生の指導を効果的・効率的に進めていくことが可能になる。



図7 教員から見える学生のデータ、ネガティブバッジ

出所：学生ステータスシステム *crescendo* 教員から検索した学生の画面（デモ学生）

## 企業ができること

基本的に *crescendo* は学内の構成員を対象としたシステムであるため、企業はこのシステムに関与することはできない。しかし、既に3で述べたように、学生の活動記録は学生自身の設定によって外部に公開することが可能であるため、もし企業が当該学生から URL を提示されたなら、その Web ページにアクセスすることで、活動記録を閲覧することが可能になる。また、学生が就職活動やインターンの際に（プレ）ディプロマ・サプリメントを紙媒体で提出してきた場合には、それによって成績履歴や基盤的能力、GPA などの他、ゼミ・クラブ・サークル活動や活動記録を把握することができる。

*crescendo* が岐阜大学の文化として根付いていった暁には、企業にもこのような形で学生の情報が開示されることで、学位証明書以外の形で学修成果を多元的に把握することができるようになるだろう。

#### 4. 今後の crescendo について

本章では、今後保守を行なっていきながら、令和8年度まで crescendo をどのように運用していくかについての長期的な計画について述べていきたい。また、その上で、この学生ステータスシステム crescendo が掲げている「学修の主体化」や「教育の質保証」をどのように実現していくのかについても構想を打ち出していく。

##### 今後着手予定のミッションについて

これまで述べてきたように、当初の計画通り、令和5年10月より本稼働が開始した学生ステータスシステム crescendo だが、岐阜大学の学生・教職員にとって必要不可欠なシステムとして根付かせるためにはまだ時間がかかると思われる。また、そのためには、さらなる機能の充実も欠かせない。ここでは、令和6年以降、継続して実現を目指していくミッションについての展望を開示したい。

まず、crescendo は、学務情報システムと同じく、最終的には学部等の事務によってその運用の一部分が担われることが望ましい。例えば、学部ごとに教員の権限設定を変更したり、システムに搭載されている標準機能を独自に運用したりすることは、学部内での議論の上、システムを担当する事務職員が行なうことが一番望ましい形だと思われる。しかし、まだ導入したばかりのこのシステムではそうした体制を実現するには時間がかかるため、当面は教学DX係がそれらの業務を担当しなくてはならない。これは、教員や学生への周知とともに、各学部等の事務職員とも打ち合わせをしながら進めていくべき事柄である。

また、当初から計画として進めているポジティブなバッジの実装だが、こちらもまだ実現には至っていない。というのは、この機能はまだ SIGEL 社が提供する START というシステムに搭載されておらず、バージョンアップを待たなくてはならないからである。現在、本学では前述の神酒太郎准教授を中心に、学部へのヒアリングによってバッジの種類を増やし、付与条件を細かく設定しつつ、アップデート後すぐに岐阜大学内のシステムとして実現できるよう、議論を進めている状況である。こちらは、令和6年の2~3月には実装される見込みである。

また、学内の教職員・学生の認知度も、まだ十分な程度にまで高まっていないという現状がある。新しいシステムを組織のすべての構成員に周知するためには時間がかかるということは当然ではあるが、システムは使ってもらってこそそのものであるため、説明会の開催と合わせ、関連する先生方に授業等で学生に案内してもらうなど、認知度向上のための活動も継続して行なっていく。在学生には健康診断、新入生にはガイダンスなど、全員揃う機会などを捉えてアピールしていく予定である。

また、基盤的能力についても、現状ではその吟味が十分であるとは言えない。というのも、平成22年に基盤的能力が策定された際には、これを数値化して、レーダーチャートのような形で表示することは想定されていなかったからである。そのため、現状、この基盤的能力

は、シラバスを書く際に個々の教員が、それぞれの基準で進伝考の 9 項目に任意でチェックを入れているという形式になっている。当然のように、基盤的能力のそれぞれに対する解釈も、いくつの項目にチェックを入れるかも教員に任されている。もしこの基盤的能力の伸長というものを、学生が目指すべき一定の基準として定めるのであれば、ここでの公平性は保たれなくてはならない。これは厳密には *crescendo*、あるいは教学 DX 推進センターの業務の範疇を越えるものだが、この機会に FD 等を開催し、この基準を明確に定めることができれば、岐阜大学全体の教育にとっても、良い効果をもたらすだろう<sup>11</sup>。

また、将来的には、現在採用されている基盤的能力のレーダーチャートと合わせて、各学部が設定している専門的能力についても、各学部の事務職員が管理することによって、システム上でチャートとして描画できるようになることを目指したい。というのも、既述の通り、岐阜大学が学部生に身につけさせたい学士力として、基盤的能力と合わせて規定されているのがこの専門的能力だからである。もちろん、基盤的能力は学部の専門科目のシラバスにもチェック欄があり、岐阜大学の学生が履修する科目全般に設定されてはいるが、他方で学部ごとに設定されているカリキュラムポリシー(CP)やディプロマポリシー(DP)があり、その達成は学部ごとの専門科目に根拠づけられているのである。それゆえ、専門的能力も合わせてチャート化することで、学生は自身の能力をより多面的に捉えられるようになるだろう。ただし、これらはあくまでデータを利活用して教育の質保証に役立てていく、ということであり、データをノルマのように使用することを企図しているのではない。太田(2023)が指摘するように、データの「強い活用」では数値目標が設定され、そこに向けての達成度が逐次公開されることになるが、これでは現場が疲弊してしまうことは避けられない<sup>12</sup>。それよりも、むしろデータを加工し、その現状を共有する中で、現場が動き出すきっかけを与える「弱い活用」こそが望ましいあり方だと考える。

これらのことの実現は、学生にとっての「学修の主体化」にこそ必要な要素であると思われる。現状でも、学生は自らの基盤的能力の伸長を確認し、どのような能力を伸ばしていくか、また目標や振り返り、活動記録等を用いて学生生活をどのように計画立てて送るかを検討することができる。しかし、基盤的能力の厳密化はこのモデルに正確さを与えることになるだろうし、ポジティブなバッジの実装は、学生にとってこのシステムを使うインセンティブになりうるものである。また、専門的能力も、学生にとって具体的な卒業時の姿を描くための素材として有用なものとなるはずである。

他方で、同じことが、実は「教育の質保証」という側面からも求められているのである。まず、基盤的能力(や授業評価の分布適正化)を再考することは、それだけで既に岐阜大学が提供する授業科目の質を保証する基準となる。また、各学部が設定している専門的能力も、仮に今後チャート化が可能になった暁には、カリキュラムの改訂等に役立てることができるようになるだろう。例えば、学部が設定している専門科目について、基盤的能力と同様の算定式を用いてチャート化した場合、学部が想定している CP や DP と、実際に開講している科目とのバランスは適正かどうかなどが可視化されることになる。

### crecendo の目指す地点について

以上のように、学生ステータスシステム **crecendo** は岐阜大学の新しいシステムとして、既存のその他のシステムとは明確に異なる意義を持って実装されたものである。例えば、学務情報システムが授業の履修や成績確認、名簿の発行等、授業関連に使われるものだとすれば、TACTはLMSとして資料の配布や教員とのやりとりなど、その補助に使われるものだと言える。そして、Teamsもおおよそ同様の意図で導入されている。これに対し、**crecendo** は学生にとっては学修の主体化、また就職活動にも使えるシステムとして、教員にとっては学生の全般的な指導、また教育の質保証に反映させるシステムとしての運用が可能である。**crecendo** 上に蓄積されたシステムは原則的には制限なく保存し続けていくことが可能なため、例えば過去の学生の情報をラーニングアナリティクスとして活用しながら適切なサポートを行なっていくことができるようになるだろう。

このように、多面的なシステムであるため、システムそのもののKPI(Key Performance Indicator)を設定することは難しいが、学生がこのシステムを自然に利活用していること、また教員もこのシステムによって学生の指導やカリキュラムの見直し等を行なっているような状況、こういったものを想定すれば、それが **crecendo** の目指すべき姿であると言える。

他方で、森本(2015)は、eポートフォリオを導入したものの、活用できずに躓いている大学も多いと指摘している<sup>13</sup>。岐阜大学がそのような轍を踏まぬためには、それぞれの学部等に密着した運用が欠かせない。4節で述べたように、今後各学部等と連携を取りつつ、それぞれの実態に応じたカスタマイズを施していくが、この過程においてはスミス(2012)が述べるように、各ステークホルダー(大学教員、大学本部、事務職員、学生、行政機関の代表、保護者、就職先など)の要求を集約しなくてはならない<sup>14</sup>。トップダウン式にシステムを開発・導入するのではなく、大学の各活動や構成員のニーズからボトムアップ式に機能を拡張させていくことが求められるだろう<sup>15</sup>。また、場合によってはTAやSAなどを使いこのシステムを率先して使用する姿を示してもらっても有効かもしれない<sup>16</sup>。このようにして大学の各構成員がこのシステムに馴染んだとき、すなわち、この学生ステータスシステム **crecendo** が岐阜大学の文化として根づいたと言えるようになったとき、私たちの取り組みは結実したことになる。

#### 【注】

- 1) <https://status-system.gifu-u.ac.jp/start/auth/login>
- 2) 令和6年度より、東海国立大学機構名古屋大学においても、独自の学生ステータスシステムを導入する予定である。
- 3) 森本康彦(2008)「eポートフォリオの理論と実際」、教育システム情報学会編『教育システム情報学会誌』、Vol.25(2)、pp.245-263。

- 4) 小川賀代(2015)「キャリア支援における e ポートフォリオ活用ー持続可能なシステムに向けてー」, 教育システム情報学会『教育システム情報学会誌』Vol.32(1), pp.27-36.
- 5) この点, 令和 5 年 4 月より本格稼働が始まった, 東海国立大学機構共通の LMS「TACT」は, 岐阜大学と名古屋大学双方で同じシステムを利用しているため, 例えば今後学生が双方の大学の講義を受講できる「連携開設科目」などを受講する際に, 混乱が生じにくいと言える。このシステムは, 従来名古屋大学で運用していた LMS である NUCT(sakai)に, 岐阜大学で運用していた LMS, Aims(Canvas)を統合するという形で実現したものである。ただし, 当然ながら, 岐阜大学側では, システムの全面的な改修による使い勝手の変化や, 従来の Aims からのデータ移行などの問題が生じた。将来的には, 岐阜大学と名古屋大学の学生ステータスシステムの連携もさることながら, それぞれの大学の学生ステータスシステムと TACT との連携も模索されていくことになるだろう。
- 6) なお, 記録として残しておくが, 最終的に決定したこの *crescendo* という名称の発案者は, このときの教学機構長でもある山田敏弘副学長であった。
- 7) 富士通 Japan が提供。
- 8) なお, 岐阜大学では, 学部の「卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)」として, この「豊かな人間性を支える基盤的能力」とともに, 「専門職業人として必要な専門的能力」を挙げている。
- 9) より細かく説明すると, 「進める力」は計画力, 実行力, 管理力から, 「伝える力」は傾聴力, 発信力, 状況は握力から, 「考える力」は課題発見力, 創造的思考力, 論理的思考力から成っており, シラバスを書く教員は, 自身の授業がこれら 9 項目のどれを伸ばすことに役立つか, 一つ以上の任意の項目をチェックすることになっている。これらの 9 項目は大学での学びを進めていく中でさまざまな順序で必要とされるもので, また PDCA サイクルのように, 課題を乗り越えながら繰り返し発揮していくべき力でもある。その意味では, 2006 年に経済産業省が提唱した「社会人基礎力」と呼ばれる概念体系と重なる点が多い。この社会人基礎力は「前に踏み出す力(アクション)」と「考え抜く力(シンキング)」, 「チームで働く力(チームワーク)」と呼ばれる 3 つの能力, またそれらに含まれる 12 の能力要素から成っている。(cf. 経済産業省ホームページ <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>) 岐阜大学の基盤的能力(進伝考)は平成 22 年(2010 年)に策定されたものだが, 両者の親近性には興味深いものがある。
- 10) この閲覧権限の設定はデフォルトのものであり, 学部や学科, 研究科ごとに合議の上で, 例えば学部全体に権限を拡大したり, 指導する学生によって学部横断的に情報の閲覧を可能にするなどの変更が可能である。
- 11) また, これも当然ではあるが, *crescendo* 上では成績評価(秀・優・良・可)によってチャートの伸長度に重みづけをしているため, 成績評価分布の適正化も合わせて徹底されなくてはならない。こちらも, 例えば大学業界の流れで, 秀や優(大学によっては S・A や AA・A などさまざまな名称があるが)は全体の 3 割(25~35%)程度にする, などの基

準が適用されつつあるように思う。こうした点も含めて、岐阜大学でも適正な成績評価分布が議論、適用されなければならないだろう。

- 12) 太田寛行・寫田敏行 編著(2023)『現場が動きだす大学教育のマネジメントとはー茨城大学「教育の質保証」システム構築の物語』, 技術評論社, pp.155-164.
- 13) 森本康彦(2015)「eポートフォリオとしての教育ビッグデータとラーニングアナリティクス」, コンピュータ利用教育学会『コンピュータ&エデュケーション』Vol.38.pp.18-27.
- 14) ジャニス・A・スミス(2012)「ポートフォリオ総論ー海外の活用から」, 『大学力を高めるeポートフォリオーエビデンスに基づく教育の質保証をめざして』, 東京電機大学出版局, p.18.
- 15) 例えば, 教育学部なら教育実習の学習録を *crescendo* 上に置き教員と学生がやりとりする, 医学部看護学科なら看護実習で身につけるべき手技一覧をチェック表として使用していくなど, 学部固有の活動に応じたカスタマイズは無数に考えられる。また, キャリア・学生支援センターと協力し, 就活サイトの適性検査結果を取り込みインターンに利用するなど, これまでにない活用法も模索していく必要もあるだろう。さらに, 学生ならではの視点からニーズを出してもらうため, Forms などでアンケートも随時行なっていく。
- 16) こうした SA や TA の多様な活用については, 杉山誠他(2016)「TA・SA の活用による基盤的能力育成を目標とした初年次教育プログラムー応用生物科学部の組織的取り組み」などの前例がある。

#### 【参考文献】

- ・太田寛行・寫田敏行(2023)『現場が動きだす大学教育のマネジメントー茨城大学「教育の質保証」システム構築の物語』, 技術評論社
- ・小川賀代・小村道昭 編著(2012)『大学力を高める e ポートフォリオーエビデンスに基づく教育の質保証をめざして』, 東京電機大学出版局
- ・小川賀代(2015)「キャリア支援における e ポートフォリオ活用ー持続可能なシステムに向けてー」, 教育システム情報学会『教育システム情報学会誌』Vol.32(1), pp.27-36.
- ・経済産業省ホームページ「社会人基礎力」  
<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html> (2023年12月25日閲覧)
- ・杉山誠・岩橋均・土田浩治・海野年弘(2016)「TA・SA の活用による基盤的能力育成を目標とした初年次教育プログラムー応用生物科学部の組織的取り組み」, 『岐阜大学教育推進・学生支援機構年報』, 第2号, pp.112-120.
- ・東海国立大学機構デジタルユニバーシティ室「デジタルユニバーシティ室における取組進捗状況報告」(2022年11月1日)
- ・内閣府ホームページ「Society5.0」[https://www8.cao.go.jp/cstp/society5\\_0/](https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/)  
(2023年12月25日閲覧)
- ・文部科学省ホームページ「令和3年度の大学における教育内容等の改革状況について」



[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336\\_00000.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336_00000.htm)

(2023年12月25日閲覧)

- ・森本康彦(2008)「eポートフォリオの理論と実際」, 教育システム情報学会編『教育システム情報学会誌』, Vol.25(2), pp.245-263.
- ・森本康彦(2015)「eポートフォリオとしての教育ビッグデータとラーニングアナリティクス」, コンピュータ利用教育学会『コンピュータ&エデュケーション』Vol.38.pp.18-27.